

朝鮮語の発音変化を分かりやすく教える方法

金 仁 姫

要 旨

朝鮮語を習う初級課程において、多くの学習者が最も難しいと訴えるところは、発音の習得と発音変化である。発音の多さの故、一個一個の発音の習得にかなりの労力が要る。また発音と発音の接続から起きる発音変化も非常に煩雑である。本稿では日本語話者を対象にして、母音字と子音字の製字原理を明かし、文字の教える順序を変えることによって、発音の習得に役に立てるとともに、日本語でも見られる発音変化の類似性を指摘し、また子音のグループ化を提示して発音変化を簡潔に学習できる教授法を提案する。

キーワード

朝鮮語、日本人学習者、発音変化の類似性、字母、教える順序、グループ化

1. はじめに

外国語を習う目的は学習者によって様々であるが、基本的にはコミュニケーションを取ることをその目的とする。自分の考えを正確に他人に発話・伝達したり、他人の考えを理解したりするためには多様な文型や豊富な語彙の確保が欠かせないが、その前に、学習の最初の時点においては、まず字母を習得し、正確な発音を練習することから始めなければならない。

一般に朝鮮語は日本語話者にとって一番習いやすい外国語といわれる。それは語順や語尾活用などの文法面で類似性が多く見られるだけでなく、日本と韓国・朝鮮は同じ漢字文明圏の中で文化や歴史が形成されてきており、交流も盛んだったことから、語彙や考え方の面でも多くの共通性が見られるからである。朝鮮語は、文法の基本を学ぶ初級段階や語彙を飛躍的に増やしていく中級以降の段階で、他の外国語に比べて、その習得は相対的に容易と考えられる。

しかし、朝鮮語はその学習のまさに最初の段階、つまりハングル文字を書いてみたり発音してみたりする段階で、意外にも難しいという印象を往々にして与える。一つは激音や濃音といった日本語にない子音の存在や母音の多さであり、もう一つは個別音と個別音の接続時に起きる複雑な発音変化の規則を覚えなければならないことである。ハングル文字は表音文字ではあるが、ひらがな、カタカナのように字母をそのまま読んで、日本語の実際の音を構成する文字とは大きな違いがあり¹⁾、ここでつまづいて、やる気を失う学習者も稀ではない。

朝鮮語の多くの教科書が発音変化をあまり重要に扱っていないという状況がある²⁾。これは基礎課程の学習者に発音変化を説明しようとする、朝鮮語は難しいという先入観を持たせ、効果的ではないという判断からであるという見解もあるほどで³⁾、発音変化は朝鮮語の学習において障壁として立ちだかっているといえることができる。しかし、だからといって、初級過程で正確な発音を教えないと、どうなるか。発音誤謬として表れる可能性の高いこと、自明ではないだろうか。

求められることは、難しいから先送りするのではなく、分かりやすく教える方法である。本稿では第一に、字母の製字原理を取り入れ、母音字と子音字の教え方を変えることを提案する。第二に、発音法則を含め、教室で簡単に取り入れることのできるいくつかの発音変化の教授法を提案する。

2. 字母の製字原理から教える

2.1 母音字

母音字の字形は、よく知られているように、中世朝鮮の人たちが宇宙の三元素として考えた「天」「地」「人」の三才を材料にし、さらに陰陽説により、それらを組み合わせて作られた。天は丸いので「●」、地は平らなので「一」、人は立っているで「|」で表現したということである。つぎに、陰陽説とは、色彩のように、音にも音色があると考えたもので、母音には陽性のイメージ（開放的、軽い、明るい）の音と、陰性のイメージ（閉鎖的、重い、暗い）の音があり、陽母音と陰母音と名付け、陽母音は東や日の出のイメージを借用し、天（●）を上や右に、陰母音は西や日没のイメージを借用し、天（●）を下や左にと、三才の配置を決め、母音字を作ったのである。

朝鮮語の母音は単母音 10 個、二重母音 11 個、計 21 個で成り立っている。単母音は、唇や舌が固定され、音をどんなに長く出しても発音する途中で音が変わらないものである。単母音は舌の前後の位置、高低、口を開ける程度、唇をすぼめるのか、すぼめないかによって区別される。字母は「ㅏ」、「ㅑ」、「ㅓ」、「ㅕ」、「ㅗ」、「ㅛ」、「ㅜ」、「ㅠ」、「ㅡ」、「ㅣ」の 10 個である。

二重母音は発音する間、音が変わり、最初の音と最後の音が違うものになるもので、「ㅘ」、「ㅙ」、「ㅚ」、「ㅜㅝ」、「ㅞ」、「ㅟ」、「ㅠ」、「ㅡ」、「ㅢ」、「ㅣ」の 11 個である。

しかし、学習者に教える時は、単母音と二重母音の説明にはあまりこだわらず、基本母音（10 個）（表 1）とその他の母音（11 個）に区分して教えるのが普通である。筆者もこれに異論はない。ただし、日本語の母音に合わせて、朝鮮語の基本母音字を日本語のア行、ヤ行に対応させて教えたほうが効果的であると考え（表 2）。

すなわち、基本母音を「基本の基本母音」（表 2 ア行の 6 個）と「派生基本母音」（表 2 ヤ行の 4 個）とに分けて考えるのである。その理由は、「基本の基本母音」を設定すれば、母音字を日本語のア行、ヤ行、さらにワ行（複母音）に対応するものとして再整理して提示できるようになり、母音の多さから来る当惑感を低減し、逆に日本語との類似性から親近感が湧くだけでなく、母音字の製字原理、つまり陽母音、陰母音といった音色の確認とともに、それによる三才の配置で、母音字が生成されたことを明確に理解できるからである。

基本母音は通常、下記のように、①から⑩の順序で教えることになるが、筆者はそれを、「基本の基本母音」(網がかからない文字の音)と「派生基本母音」(網がかかった文字の音)に分け、(表2)のようにして教えている。日本語のア行とヤ行に対応させたことと発声の方法を明記したことが特徴である。

(表1) 基本母音

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅣ

(表2) 基本の基本母音と派生基本母音

ア 行	(口を大きく開けてア)	(口を開けてオ)	(口をすぼめてオ)	(口を突き出してウ)
	① ㅏ	③ ㅓ	⑤ ㅜ	⑦ ㅜ
	(口を横に引いてウ)	(口を少し開けてイ)		
	⑨ ㅡ	⑩ ㅣ		
ヤ 行	(口を大きく開けてヤ)	(口を開けてヨ)	(口をすぼめてヨ)	(口を突き出してユ)
	② ㅑ	④ ㅕ	⑥ ㅛ	⑧ ㅠ

(表2)を使って教える際、重要視していることは、陽母音(陰母音)の陽母音(陰母音)たる理由を明確に理解させ、字形がそのようになった理由につなぐことである。

たとえば、①の「ㅏ」と②の「ㅑ」を比較させる。二つの音を表す字形上の共通点はどちらにも「ㅣ」が入っていることであり、相違点は短い横棒、これは15世紀にハングルが創られた当初は天=●であったが、この横棒の向きである。

まず、発音を聞かせて、どちらも口を開ける方法で一致していることを確認する。そこで、口を開ける印として、三才から「ㅣ」(人)が共通として入ることになる。開けた口にチョークを立てて見せると、ピンとくる。つぎに、短い横棒であるが、「ㅏ」は明るく、軽く、高く、開放的な感じの音なので陽母音とし、「ㅓ」は、同じような発声の仕方をするが、どこか暗く、重く、低く、閉鎖的なトーン音なので陰母音であることを確認する。これは感じ方にも依るので、個人差は避けられないが、大概の学生は納得する。そこで、陽母音の「ㅏ」は、「ㅣ」から短い横棒が右(東=日の出の方位)に伸びて、「ㅏ」の形になる。陰母音の「ㅓ」は、「ㅣ」から西(日没の方位)に伸びて「ㅓ」になると説明する。

つぎに、同じ要領で、⑤の「ㅗ」と、⑦の「ㅜ」を比較させる。字形上の共通点はどちらにも「ㅡ」(地)が入っていることである。これは口を開けず、唇をしばめたりするだけだからである。チョークを横にして唇につけて見せる。短い棒は、今度は縦になっているが、これは水平

の「一」によって上下に伸びることになるからである。「ㄷ」と「ㅌ」を発声させて、「ㄷ」は陽母音、「ㅌ」は陰母音であることを実感させ、陽母音の「ㄷ」は上に伸び、陰母音の「ㅌ」は下向きに伸びたことを理解させる。

初心者から見ると、ハングル母音字の「ㅏ」「ㅑ」「ㅓ」「ㅕ」「ㅗ」「ㅛ」「ㅜ」「ㅠ」「ㅡ」「ㅣ」など、みんな似通った記号に見え、区別がつかないとよくいう。以上のような製字原理を教えると、このような苦情も無くなる。これは文字を教える上でも役に立つが、実はそれよりも母音調和やへヨ体（略待丁寧形）など用言活用の説明において、鍵となるので、きちんと教えたい。

つぎに、母音字を教える時にいくつか注意すべきことを記しておきたい。

日本の学習者が10個の基本母音（表1）の内、発音の間違いを起こしやすいのは、「ㅓ」と「ㅗ」の区別、「ㅓ」と「ㅜ」の区別、「ㅌ」と「ㅡ」の区別にあることは先行研究でもよく言及されている⁴⁾。

「ㅓ」(③)、「ㅓ」(④)、「ㅡ」(⑨)は日本語に対応する音がなく、教える時に注意が必要である。口を開けることと唇をすぼめないことを教えると、効果がある。

「ㅏ」(①)、「ㅑ」(②)、「ㅓ」(③)、「ㅕ」(④)は口を「ㅏ」(①)のように開けて同じ口の形を保ちながら発音させる。

「ㅓ」(③)、「ㅕ」(④)は、「ㅏ」(①)、「ㅑ」(②)と比べると、口の開け方が少し小さいが、最初は誇張させて言わせた方が口をすぼめて発音する「ㅗ」(⑤)、「ㅛ」(⑥)との差異を認識させる上でよい。また、「ㅡ」(⑨)の発音は口を横に少し引っ張って「ㅌ」(⑦)を発音するようにすると教える。

整理すると、「ㅏ」(①)から「ㅕ」(④)までは、口を「ㅏ」(①)のように開けて発音して、「ㅗ」(⑤)から「ㅠ」(⑧)までは、口を「ㅗ」(⑤)のようにすぼめて発音して、「ㅡ」(⑨)は口を横に引っ張って発音させる。

研究者の中には朝鮮語の「ㅌ」と日本語の「ウ」が同じく「u」として表記されているテキストが多いということを指摘しながら、朝鮮語の「ㅌ」は日本語の「ウ」よりも口をもっとはっきりとすぼめる円唇音であり、日本語の「ウ」に近いものは、舌の後ろで発音する後舌音の「一」であるという⁵⁾。

たしかに、日本語をハングルで表記する時、「す」、「ず」、「つ」、「づ」をそれぞれ「ㅌ」、「ㅌ」、「ㅌ」、「ㅌ」にするのはあるが、それ以外のほとんどの場合は「ㅌ」を使用している。どの子音に着くかによって、「一」、あるいは、「ㅌ」を使い分けていると考えられる。

基本母音が終わると、その他の11個の母音を母音字の辞書順に沿って、「ㅏ」(①)、「ㅑ」(②)、「ㅓ」(③)、「ㅕ」(④)、「ㅗ」(⑤)、「ㅛ」(⑥)、「ㅜ」(⑦)、「ㅠ」(⑧)、「ㅜ」(⑨)、「ㅜ」(⑩)、「ㅜ」(⑪)の順に教えることになる。この時、基本母音で習った発音を利用して教えたらいい。「ㅏ」、「ㅑ」、「ㅓ」、「ㅕ」、「ㅗ」、「ㅛ」は最初の音と最後の音を続けて発音すれば良いので、発音と字形が一致しており、教えやすいが、「ㅏ」、「ㅑ」、「ㅓ」、「ㅕ」と「ㅗ」の発音は注意を要する。これらは二つの音を続けて発音するのではなく、最初の音は音を出さずに、その音の意味する口の形だけをして（したまま）、後ろの音を発音するものであるからである。

「ㅏ」(①)と「ㅓ」(③)の場合は、たまに発音の差異があるといつて、「ㅏ」(①)は「ㅓ」(③)より口の形を大きくして発音させる指導をしたりもするが⁶⁾、朝鮮語母語話者も発音の差異を認

識できない実情なので、指導しなくてもいいと思う。ただ、日本語の「エ」の発音であるということ記憶させる時は、「ㅈ」(㉠)がどうして「エ」の発音になるのか、その理由を明らかにする必要はある。「ㅈ」は字形からも「ㅌ」と「ㅣ」の合成であることが明らかである。すると、「ㅌ」と「ㅣ」を連続して発音すればいいと勘違いしやすいが、「アイ」と発音すると駄目である。「エ」が正しい発音であり、「アイ」をいくら早く発音しても「エ」にはならない。つまり、連続して発音するものではないということである。それは、「ㅌ」の口の形をしながらか「ㅌ」の発音はしない、「ㅣ」を発音させてみる。つまり、「ア」の口の形のまま、発音はしないで、「イ」と発音してみる。すると、「エ」の発音になる。「ㅈ」はそういう音である。

日本語でも、たとえば、「うまい」の「まい」(mai)の、「ai」の部分で「e」と発音して「うめー」と発音する時がある。フランス語の「ai」も「ɛ」の音を表していて、「a」と「i」の音が「ɛ」となる現象は特殊なものではないことを示している⁷⁾。

「ㅉ」(㉡)の場合も同じ方法で、「ㅌ」の口の形をしながらか「ㅣ」の発音をさせる。以前は「ㅈ」と「ㅉ」の二つの音は、明確に区別されたが、現代では母語話者にもその差異がほとんどなくなったと付言すればいい。

また、「ㅊ」(㉢)と「ㅑ」(㉣)の場合は「ㅈ」と「ㅉ」より一画増えた理由は、「y」の音が追加され、「イエ」と発音するからである。

「ㅓ」(㉤)の場合は、字形上、「ㅌ」と「ㅣ」の結合ではあるが、「oi」ではなく、「we」の発音なので、字を見てもすぐには認識することができない。これも「ㅌ」は発音しないで、「ㅓ」の口をただけで、「ㅣ」を発音する音である。すると、多少重い感じの「we」の音になる。字が作られた当時では「oi」だった音が「ø」になり、さらに「we」へと変わってきたこと⁸⁾を説明してもよいだろう。

最後の「ㅜ」(㉥)の場合は後舌母音「-」と前舌母音の「ㅣ」が組み合った複合母音である。一般的に基本母音や複合母音は前舌から後舌へ発音が移動していく傾向があるが、「ㅜ」(㉥)はその傾向とは逆なので、発音が難しいのである⁹⁾。また、発音も位置によって以下のように三つあるので注意が必要である。

- 1) 語頭では字形通りに「ㅜ」例) 의자 (椅子)
- 2) 非語頭で、また子音と合体する時は「ㅜ」例) 거의 (ほとんど)、희망 (希望)
- 3) 助詞として使われる時は「ㅜ」か「ㅜ」例) 저의 (私の)、의자의 (椅子の)

この三つのバリエーションを一つの語句の中で練習させたいが、「민주주의의 의의 (民主主義の意義)」には「ㅜ」母音が続けて4回入っており、練習に適している。

なお、「ㅜ」(㉥)を助詞として使う時は、電話番号と歌における時だけ、例外的に「ㅑ」とし、この他においては、すべて「ㅜ」と発音すべきであるという見解もある¹⁰⁾。たしかに、「ㅜ」(㉥)を助詞として使う時、「ㅜ」で発音しないと不自然な場合もあるので、一理はあると思うが、実際のこと、ほとんどの場合は、「ㅑ」として発音するのが現状なので、「ㅑ」の発音を基本とし、例外的に「ㅜ」と発音する場合もあるとしたほうがいいだろう。

2.2 子音字

子音字には基本子音字 14 個といわれる濃音の 5 個があり、合計 19 個ある。子音字を教える際、

最も多い教え方は、ㄱ、ㄴ、ㄷ、ㄹ、ㅇの順に教える、すなわち、辞書順に沿った方法らしい¹¹⁾。その後、ㄲ、ㄷㅇ、ㄸ、ㅃ、ㅆの濃音字をまとめて教えているようである。

もちろん、それぞれの字形を説明する時、子音字の製字原理、つまり、子音字は、子音を出す時の発音器官の形を模して、まず、ㄱ、ㄴ、ㄷ、ㄹ、ㅇの五つの形を確定し、その上で、加画していったということを説明しているはずである。

辞書順に沿った、このような方法では、製字原理を説明するとしても、「この字はこのようにして創られた」という知識を持つことはできても、子音と子音の接続による発音変化の規則にまで視野に入れた説明にはならない。発音変化の難解さを考慮に入れ、できれば、子音字を習う段階から音を意識した教え方が望ましい。つまり、下記のように、発音器官の違いによる五つの「基本の基本子音」を設定し、それぞれの音の系列に沿って、変化していく音の違いを意識させるのである。

ㄱ→ㅋ→ㄲ
 ㄴ→ㄷ→ㄸ / ㄹ→ㄺ
 ㄷ→ㅌ→ㄷㅇ→ㅆ
 ㄹ→ㄴ→ㄴㅇ→ㄴㅇ / ㄴㅇ
 ㅇ→ㅇ

しかし本稿では、まず上記のような子音の系列を教えた後は、以下の表2のように、子音を4つのグループに再構成して、1)、2)、3)、4)の順に教えることを提案する。なお、子音のグループ化という発想と、後述する発音変化の教え方については、嚴敏俊(2003)に依るところ大きい。

(表3) 子音を4つのグループ

1) 子音 (平音1) (ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅇ) - 発音しやすいパッチム1 (ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅇ)
2) 子音 (平音2) (ㄱ, ㄷ, ㄹ, ㄴ, ㅇ, ㅇ)
3) 激音 (ㅌ, ㅋ, ㅌ, ㅌ)
4) 濃音 (ㄲ, ㄷㅇ, ㄸ, ㅃ, ㅆ) - 発音しにくいパッチム2 (ㄱ, ㄷ, ㄹ) - パッチム3 (二重パッチム)

子音をグループ化して、1)、2)、3)、4)の順に教える理由は、後に学ぶ発音変化(激音化、濃音化、鼻音化など)で理解力を高めるだけでなく、パッチム(終声)の発音に難しさを感じる日本語母語学習者に分かりやすく教えることができるからである。

まず、グループ1)の子音(ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅇ)を教えて、つぎに、発音しやすいパッチム1(ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅇ)を教える。パッチム1も日本語話者にとってはそれぞれの区別が難しい。すべてが撥音「N」のように聞こえることがある¹²⁾という。その対策としては、初声と終声(パッチム)に同じ子音を入れて発音の練習をさせる。ㄴなら、たとえば、ㄴ(ㄴ)を発音させる。同じㄴで始まってㄴで終わる。ㄴ=ㄴは、「ナ」を発音すればわかるように、舌を前歯の裏につけることで得られる音なので、ㄴ(ㄴ)は舌を前歯の裏につけた状態から始まって、再び前歯の裏につけることで終わる発音になる。それに比べて、ㅃ(ㅃ)は「マ」を発音すればわかるように、口を閉じることで得られる音なので、口を閉じた状態から始まり、再び口を閉じて終わる音である。このようにして、すべ

てが撥音「N」のように聞こえるという難解さを解決する。

なお、下記の(表4)のように日本語の語彙を取り入れて練習させてもいい。

(表4) パッチム1の発音の説明

パッチム1 (ㄷ, ㄹ, ㅇ) の発音
ㄷ : あ <u>ん</u> ない ㄹ : あ <u>ん</u> まり ㅇ : あ <u>ん</u> がい

つぎに、グループ2)の子音2(ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㆁ, ㆁ)の場合は、有声音化(濁音化)についてしっかり教えておくことが大事である。その際、以下の四つのことに留意させる。

1. ㆁは有声音化にならないこと。日本語ではサ行の濁音があるので間違いやすい。
2. ㆁの濁音は「ザ」行にならず、「ジャ」行になること。朝鮮語には「ザ」行の音が存在しないことを教える。
3. ㄱとㅋには有声音化があるものの、語頭では日本語の「ガ」行と「ダ」行の音のように濁ることはない。
4. ㆁの場合、「タ行」のように、「チ」や「ツ」のようにはならない。ㄷとㄷㅎは、それぞれ「ティ」「トゥ」に近い¹³⁾。

なお、ㅎについては、昔は激音として発音されたが、今は日本語の「ハ」行のように発音すればよいと教える。

グループ3)の激音(ㆁ, ㆁ, ㆁ, ㆁ)の発音は、日本語に対応する音がないので、「h」の発音を入れて、強く息を出してすると教えるほかない。平音と激音の違いに対する研究は音調教育をはじめ、声帯振動の開始時間(VOT)、閉鎖時間、空気学的研究など、様々なものがあるが¹⁴⁾、一般教室で活用されるとは思えない。口の前に紙切れを当てて、息を強く出すことで、揺らすように指導する。

最後に、グループ4)の濃音(ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㆁ, ㆁ)の場合は、日本語の促音「ッ」の発音方法を上手に使うと、効果的である。前に「ッ」があるかのようにして、つまり、息を吸い込んで、喉の奥で詰まるようにして発音すると教える。腹筋するように、お腹に力を入れて体をやや後ろに持って行って発音すると教える。発音しにくいパッチム2(ㄱ, ㅋ, ㆁ)を濃音の学習後に持ってくると、そのコツを掴みやすい。その際には表4のように、日本語の単語を使って何度も練習させる。

(表5) パッチム2の発音の説明

パッチム2 (ㄱ, ㅋ, ㆁ) の発音
ㄱ : し <u>っ</u> かり ㅋ : い <u>っ</u> たい ㆁ : た <u>っ</u> ぷり

パッチム3(二重パッチム)の場合は、ㄱ, ㅋ, ㆁの場合だけは右にあるパッチムで発音し、それ以外は左のパッチムで発音すると、教えると分かりやすい。ただ、ㄱは例外の場合もあり、읽기のように、ㄱの後にㄱが続くと、左のパッチムで発音するとともに、ㄱの発音も濃音化する。

例) 읽기「일끼」

3. 発音変化を教える

3.1 発音変化とは何か

記号のようだったハングル文字の習得が終わって、いざ文章を読もうとすると、多くの学習者は、表記された通りに読まない箇所が多いという事実を知り、戸惑う。ここで、朝鮮語の学習に意欲を喪失してしまう例もある。

このような状況では発音変化をどのように導入するかが重要になる。筆者は、以下の三つの方法を考えたい。

- ①同病相憐
- ②表記通りに読ませる
- ③簡潔な方法

1) 同病相憐

「同病相憐れむ」とは、朝鮮語に見られる発音変化が日本語にも見られるということである。たとえば、「応用」の「応」は「オウ」と読むが、「反応」の中に入ると、「ノウ」のようになる。また、「部屋」もふつうは「ヘヤ」と読むが、博士部屋になると、「ベヤ」になる。このように、日本語でも前後の接続関係によって、(広い意味の)音便現象が多く見られる。日本語を学ぶ外国人学習者にとって、まず漢字を覚えなければならない障壁があるが、それを習得できたとしても、日本語の漢字を読む場合は、人名や地名になるとさらに混乱するが、音便現象によって、語彙一つひとつにおける実際の発音を覚えなければならないという困難がつきまとう。

朝鮮語にも当然、そのような音便が生じるのであって、書かれている通りに読まないことは何も朝鮮語に特有の現象ではない。ただ、違いがあるとすれば、日本語にたとえていえば、「博士部屋」の場合、音便以前の元の読み方、つまり「ハカセヘヤ」とハングルで書き、読む時は「ハカセベヤ」と読むので、書かれている通りに読まないような印象を持つに過ぎないということである。発音法則を理解すれば、どう読むべきかを理解できるようになる。なお、「反応」で見られる「o」が「no」に変わる現象は、朝鮮語(ㄴ添加)でも見られる。

2) 表記通りに読ませる

発音変化に入る前に、次の文章を提示して、わざと表記通りに読ませる。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17
 집에 가서 밥을 먹고 한국어를 숙제를 합니다.
 (家に帰って、ご飯を食べて、韓国語の宿題をします)

学習者に1番から17番まで表記通りに読ませて、続けて発音しにくい部分、すなわち、一文字一文字ずつ発音するとき、止めないと次の文字が読みにくい文字の番号を選ばせると、大部分の学習者は2、6、8、11、13、16番を選ぶ。表記通り読めば、何度も止まらなければならないことがよくわかる。表記通りに読む難しさを感じさせることが狙いである。発音変化というのは、難しくするためではなく、逆に発音をしやすくするためであること、自然な音便現象であること

ㄷ、ㅌ」がそれぞれの激音「ㄱ、ㄴ、ㅇ、ㅈ」に変わるということである。発音しにくい子音(ㄱ、ㄴ、ㄷ、ㅌ)が激音に変わるということを説明したらいい。

日本語で、一(イチ)と杯(はい)が合体すると、一杯(イツパイ)になるのも、発音しにくいパッチムとして見ることができる「っ」の後の「は」は発音しにくいので、「ぱ」に発音が変わったものとして見ることができる。

さらに、日本語では「ㅎ」の脱落現象も見られる。たとえば、「私は」「学校へ」「木村といふ人」などである。類似する発音変化を提示することで、複雑な「ㅎ」の説明も容易になる。

3.4 鼻音化

発音しにくい子音の後に発音しやすい子音が続くと、発音しにくい子音がそれぞれの発音しやすい子音に変化するということである。以下の表の①、②、③は字画を加えて作った原理として説明が可能である。ㄱ(k)がㅇ(ng)に変化する④の場合は字形が異なるので、疑問を持つだろう。swimming を日本語で読んでみよう。「スウイミング」、swimming-**gu**になる。また、音楽を「ong-gaku」で発音するのを例に挙げて、ng と g, k の関連性を指摘することができる。

① ㄱ → ㄴ
② ㄴ → ㄷ
③ ㄷ → ㄱ
④ ㄱ → ㅇ

3.5 濃音化

発音しにくいパッチムの後に発音しにくい子音が来ると、それぞれの濃音に変わって発音されることである。日本語でも、たとえば、1回(いっかい)を「いっがい」と発音すると仮定して、発音させると、発音しにくい発音として見ることができる「っ」の後の「か」は発音しやすいが、「が」として発音するのは難しいということを感じるだろう。有声音化で発音するのが逆に難しいということを理解させることができる。

例外として、濃音化では二重パッチムㄷ의發音は原則的に右の方のㄷを發音するが、ㄷ의後にㄱが来ると、左のㄷを發音するということを説明するのが必要である。また、濃音化では発音しやすいパッチムㄴ、ㄹの後、漢字語のㄷパッチムの後、「ㄱ/ㄷ」の後、合成語の後に、発音しにくい子音が来ると、有声音化が起きず、濃音として発音するものもあるが、これらの例は基礎課程における説明は避けて、ある程度発音変化に慣れた時に教えるほうが効果的である。

3.6 口蓋音化

普通の連音化とは違って、ㄴパッチムとㄷパッチム後に母音ㅣが来ると、

ㄴ + ㅣ → ㄷではなくㄷㅈに

ㄷ + ㅣ → ㄷㅈではなくㄷㅈに發音される現象である。

それなら、このような現象をどのように説明したらいいだろうか。歯茎硬口蓋音化と説明しても何のことかわからない。Ticket, dramatic, dilemma を日本語で読んでみるようにする。Chicketto,

doramachikku, jiremma のようになる。前述の子音 2 (ㄷ) で説明したように、日本語のタ行には子音の不一致が見られる。本来日本語では「ティ」と「ディ」の発音が存在しない。しかし朝鮮語では「디」も「티」も存在しているが、それにもかかわらず、連音になると、「ジ」と「チ」になるのである。日本人のように、韓国人にも「디」と「티」は発音するのが難しい発音である。このような説明で少しは納得できるようになる。

4. 結論

文法などの類似性が多いということで、朝鮮語を習う日本語話者は少なくない。しかしその多くの学習者が入門段階の発音練習でつまづいて、学習意欲を失うとなればとても残念なことである。そこで、本稿では少しでも発音を分かりやすく理解するように、大学で初級クラスを担当する経験をふまえ、以下のことを提示した。

1. 字母の製字原理による教え
2. 子音のグループ化
3. 日本語にも朝鮮語と類似した発音変化が起きるということを指摘する
4. 説明の簡潔化

2.1 では、日本語の発想に合わせて、基本母音をさらに日本語のア行、ヤ行に分けて教えることを提案した。すなわち、基本母音を「基本の基本母音」と「派生基本母音」として見るのである。さらに、基本母音のうち、日本語話者が発音の間違いを起こしやすい「ㄷ」と「ㄷ」の区別、「ㄷ」と「ㄷ」の区別、「ㄷ」と「ㄷ」の区別を取り上げ、「ㄷ」と「ㄷ」は口を「ㄷ」のように開けて同じ口の形を保ちながら、発音させる方法を、「ㄷ」と「ㄷ」においては合体する子音によって使い分けすることを提案した。複合母音では「ㄷ」と「ㄷ」を、日本語の「エ」として見るものの、「ㄷ」の口の形をしながら「ㄷ」を発音させて確認するようにすることを指摘した。「ㄷ」においては語頭では「ㄷ」、非語頭または子音と合体するときは「ㄷ」、助詞として使われるときは「ㄷ」と発音し、例外として、「ㄷ」で発音することもあるとした。

2.2 では、発音変化（激音化、濃音化、鼻音化など）の時、理解力を高めることと、パッチムの発音を分かりやすく教えるために、子音を 4 グループに分けて教えることを提案した。グループ 1) の発音しやすいパッチム 1 (ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㅇ) では、すべてが撥音 [N] のように聞こえる学習者に日本語を使って説明することを、グループ 2) の子音 2 (ㄱ, ㄷ, ㅁ, ㅂ, ㅅ) では有声音化時に注意することをまとめた。

3 の発音変化では導入部分で、同病相憐方法、表記通り読ませる、簡潔な方法を提案した。連音化、きの発音変化、鼻音化、濃音化、口蓋音化の説明ではそれぞれ日本語にも見られる発音変化の類似性を取り上げた。

注

- 1) 朴南圭・田島ますみはハングル文字について、ひらがな、カタカナのように文字が表象する音と実際の音が一致する日本語とは大きな違いがあり、日本語話者にはなかなか習得できない点があり、文字と音の違いに慣れるには多くの時間と訓練が必要であるとする (53 頁)。
- 2) 이선아, 2000, p.43.
- 3) 이윤희によると、韓国で出版される多くの教材が発音変化を扱っていないのが現状で、その理由として韓国における最近の発音指導法は「下向式接近法」が強調される傾向があり、初期学習者に発音変化を説明すると、韓国語は難しいという先入観を持たせ、効果的ではないという判断からであるという (p.2)。
- 4) 金秀炫は、言語圏別にそれぞれの言語圏の学習者が共通して間違った発音をする傾向があると指摘して、日本語圏の学習者の場合は「ㄱ」と「ㄲ」の区別、「ㄷ」と「ㄸ」の区別、「ㄴ」などの発音で苦労しているとしている (p.43)。
- 5) 이윤희, 2002, p.85.
- 6) 金秀炫は、「ㄱ」の発音について、「ㄱ」を発音する時よりもっと口を開けて、上あごの歯と下あごの歯の間に小指が入るくらいの大きさの開け方にして、「ㄴ」のほうは、「ㄱ」を発音するよりもっと口を開けて、上あごの歯と下あごの歯の間に親指が入るくらいの大きさにすることを勧めている (p.46)。
- 7) 田川光昭は、韓国語の綴り字「ㄴ」は「ㄷ」と「ㄴ」が合成されたものであり、アルファベットの ai に相当する。ところで、韓国語の「ㄴ」もフランス語の ai も、ともに「[ɛ]」の音を表していると記している (122 頁)。
- 8) 이윤희, 2002, p.95.
- 9) 金泰虎によると、一般的に単純母音や複合母音は前舌から後舌へ発音が移動していく傾向がある。たとえば、「ㄷ」をゆっくり発音してみると、前舌母音の「ㄷ」から後舌母音「ㄸ」へ発音が移動していくことが分かる。しかし、「ㄴ」はこの傾向とは方向が逆なので、その発音が難しいとしている (65 頁)。
- 10) 金泰虎, 2005, 72 頁。
- 11) 中島仁, 2010, 134 頁。
- 12) 中島仁は、終声の鼻音はㄹ [m]、ㄴ [n]、ㅇ [ŋ] があり、日本語母語話者には全て撥音/N/のように聞こえることがあるとする (136 頁)。
- 13) 中島仁はㅂ/b/はㅍ行の子音、ㅈ/j/はㅊ行の子音、ㄱ/g/はㅋ行の子音というような説明のみで充分と言えるが、ㄷ/d/の場合は「ㄷㄷㄷ」ではなく「ㄷㄷㄷㄷ」となり、日本語のㄷ行とは異なる点をしっかり認識させる必要があるとしている (135 頁)。
- 14) 古閑恭子, 2004, 39 頁。

参考文献

(韓国語)

- 권 경애 「일본어 모어화자의 자연스러운 한국어 발음교육을 위한 연구 (초분절적 요소를 중심으로)」, 韓國 外國語大學校外國語教育研究所, 外國語教育研究, 第 25-1, 2011, pp. 1-24.
- 金 秀炫 「한글 자모 발음 교육연구」, 京都女子大學人文論叢, 第 58 号, 2010, pp. 35-52.
- 이 선아 「일본어 화자를 위한 한국어 교재의 분석과 개발 방향」 梨花女子大學校教育大學院碩士論文, 2000.
- 이 윤희 「일본어 모어 화자를 위한 한국어 발음 지도 방안 (자모의 형태와 발음의 접목을 통하여)」, 梨花女子大學校教育大學院碩士論文, 2002. pp. 1-153.
- 이 재강 「한국어 모음에 대한 한국인과 일본인의 대조 연구」, 韓國言語學會, 言語學, 22, 1998, pp. 347-370.
- 하세가와 유키코 「일본 학습자에 대한 한국어 발음 지도법 (입문 단계를 중심으로)」 국제한국어교육학회,

韓国語教育、Vol.8、1997.

——「일본어를 모어로 하는 학습자에 대한 음조 교육의 효과」 국제한국어교육학회, 韓国語教育, 제 16권 3호, 2005.

한 채영 「한국어 발음 교육」 韓国語教育總書 1, 翰林出版社, 2003.

(日本語)

伊東博文「韓国語日本語学習者が発音する日本語のアクセントの傾向（その2）（頭高方アクセントに関連して）」昭和三女子大学、日本文学紀要、No.855、2012、9-15頁。

岡崎志律子「韓国語母語話者による日本語破擦音 [つ] の発音について（調音点分析と音響分析による）」商学部編、東京国際大学論叢、第67号、2003、23-35頁。

——「母語の発音と日本語の発音（上級韓国語母語話者の1例）」商学部編、東京国際大学論叢、第68号、2003、73-80頁。

金 泰虎「韓国語 「의/-이」及び「~의」に関する発音教育（外国語としての韓国語学習者を対象に）」大阪経済法科大学、アジア研究、第43号、2005、61-72頁。

嚴 敏俊「日本語話者に韓国語の用言活用をいかに教えるか」立命館高等教育研究、第2号2002、25-37頁。

——「日本語話者に韓国語の発音変化をいかに教えるか」立命館言語文化研究、14巻4号、2003、197-203頁。

古閑 恭子「日本語を母語とする韓国語学習者による韓国語の平音・濃音・激音の発音と聴き取り（聴き取りテストの結果をもとに）」東京成徳大学研究紀要、第11号、2004、39-50頁。

田川 光照「韓国語における三子音の法則（フランス語を通して見た韓国語）」愛知大学語学教育研究室、言語と文化、No.13、121-128頁。

中島 仁「朝鮮語における発音指導（指導と教材の現状）」外国語教育学会、外国語教育研究、第3号、2010、130-138頁。

朴 南圭・田島ますみ「外国語教育における Speak Everywhere の有効性について（韓国語の文字と発音のずれを中心に）」中央学院大学人間・自然論叢、2013、48-59頁。

梁 炫玉「日本語を母語とする韓国語学習者のための韓国語の発音教育（入門期学習者のための母音・子音の発音教育に関して）」大阪経大論集、第59巻、第2号、2008、45-64頁。

Comprehensible Teaching Method of Korean Pronunciation Change

KIM, Inhee (Lecturer, Language Education Center, Ritsumeikan University)

Abstract

Mastering pronunciation and pronunciation change are the most crucial concern widely shared by learners in Korean language beginner's class. Lists of pronunciations require an immense amount of time and effort to learn and the pronunciation change generated by phonetic juncture add additional complexity to the language. In this paper, we propose effective learning method for native speaker of Japanese. The content of the method include revealing principles of how vowels and consonants are generated, making rearrangements in teaching letters for better understanding, indicating similarities found in Japanese pronunciation change, and presenting grouped consonants specially organized for effective learning .

Keywords

Korean, Japanese Learner, Similarities in pronunciation change, Consonant and Vowel, Teaching order, Grouping